

女子部中等科・高等科

探求「一人ひとりが自身の「問い」に向き合う学び～」

鈴木雄紀

2020年度、女子部では中等科1年生から高等科3年生までの全学年が、総合的な学習の時間として探求を行った。この探求の特徴は、教員が探求のテーマを提示するのではなく、生徒一人ひとりが自分の興味関心や、身の回りの生活から、自分が探求するテーマ＝「問い」を立てたこと、教員は生徒の問いを受け止め探求する生徒を援助する役割に徹したことである。生徒には1学期の終業式でガイダンスを行い、2、3学期には一日中探求に取り組むことができる日を月に1、2日設けた。その日には、生徒は各自で調査を行ったり、教員と相談をしたり、校外学習に出かけたり、学校で行われる講座やワークショップに参加したりしながら、探求に取り組んだ。3学期にはそれぞれが探求した内容を共有する会を行い、最後に生徒は自身が探求したことについてレポートを提出した。

I. 目的

2020年度、女子部では中等科1年生から高等科3年生までの全学年が、総合的な学習の時間として探求を行った。この探求プログラムの目的は、一言で言えば生徒の「自ら学ぶ力、姿勢を育てる」ことである。本プログラムでは、この「自ら学ぶ力、姿勢」を「自らの興味・関心に基づき、自ら目標を設定し、振り返りつつそこに向かう力」と捉えることとした。この目的を設定した背景には、2019年5月に女子部生、男子部生を対象に行ったアンケート調査がある。この調査において、「私にとってこの学校は主体的に学ぶことのできる環境である」「私はこの学校での学びに目的や意欲を持って臨んでいる」「私はこの学校で「学び方」について学ぶことができている」という質問に対する女子部生の肯定的な回答の割合はそれぞれ、65%、59%、48%であった。この割合をより増やすため、生徒が主体的に学べ、学びに目的や意欲を持つことができ、学び方について学べる環境を探求でつくりたいという動機があった。

本プログラムでは、「探求」を「自分自身の『興味・関心』から、あるいは自分自身のまわりや生活における『問い』の発見から出発し、調査・研究を踏まえ、常にリフレクションを行い『学び』や自分自身を問い直しながら、他者と協働しつつ

問題解決に向かう実践的な学び、そして、生涯を通じて自分自身を変容させていき、よりよい社会を創っていくことをめざす学びのすべて」と定義した。生徒全員一人ひとりが自分で問いを発見し、問いを立てなくてはならないという点が本プログラムの特徴の一つであったが、「自ら学ぶ力、姿勢」を育てるためには、現段階ではそれが必要であると考えたためである。生徒一人ひとりの問いや、問いに向けての試行錯誤を大切にするため、また、生徒の問いは、特定の教科の中には納まらない場合がほとんどであることが想定されるため、本プログラムにおける教員の役割としては、生徒に専門的な知識を与えることよりも、生徒の学びに伴走して記録し、学び方をアドバイスすることを重視した。

問いを立てること、その問いに向かうことに加え、毎回の探求でリフレクションを行ったことも、「自ら学ぶ力、姿勢」を育てるために今回の探求で大切にしたことである。探求の過程において他者と協働することや、探求の学びの先に、自己変容や、良い社会をつくることを目指していくことも、今回の探求で大切にしていたことではあるが、一番の目的は「自ら学ぶ力、姿勢を育てる」ことであった。

II. 準備

2020 年度に探求を行う準備は、2019 年度から女子部教師会で行われていた。当初は、2020 年の 4 月から実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響で 1 学期がオンライン学習となったため、スケジュールを変更し 1 学期は教員の準備期間となった。本プログラムには、女子部の常勤教員全員が関わり 1 つのチームとして動いたが、生徒の発達段階に応じて検討するため、中高の 2 グループに分かれてさらに細かく検討を重ねた。

また、探求プログラムを始めるにあたり、生徒に配布する「探求ガイド」を、最高学部の成田喜一郎先生にご協力いただきながら作成した。このガイドは、2020 年 4 月に作成された『自由学園探求ガイド：探求者市民になるために（試案）』をもとにしている。

III. 夏休み～2 学期の取り組み

1. 夏休み

1 学期の終業式に、生徒に探求ガイドを配布し、探求のガイダンスを行った。ガイダンスでは「問いを立てる」「問いに向かう」「リフレクション」という探求の 3 つのポイントについて説明するとともに、「言葉の意味や定義を問う問い」や「原因を問う問い」「信ぴょう性を問う問い」など、問いの種類の分類や、コンセプトマップの書き方についての説明を交えながら、問いの立て方についてレクチャーを行った。

また、探求ノートの説明も行った。探求ノートとは、後で自分自身で探求を振り返るために、探求の活動を通して得られた情報、その情報源、自分自身の意見や感情、今後の課題を記録するもので、今回の探求では、全員が探求ノートを各自の様式で作成することとした。

夏休みには、各自が問いを立て、それに向けて探求し、取り組んだことを探求ノートに記録することを課題とした。7 月 20 日～8 月 1 日の間には、教員と zoom や電話で探求の中間報告と相談を行う機会を設け、各自 1 回は中間報告を行うこととした。

2. 2 学期のはじめ

2 学期、3 学期には 1 日中探求に取り組む日を以下の 12 日設けた。

8 月 29 日（土）	11 月 17 日（火）
9 月 4 日（金）	12 月 2 日（水）
9 月 17 日（木）	12 月 16 日（水）
10 月 14 日（水）	1 月 18 日（月）
10 月 20 日（火）	2 月 4 日（木）
11 月 2 日（月）	2 月 5 日（金）

このうち、2 月の 2 日間は探求内容を共有する会である。

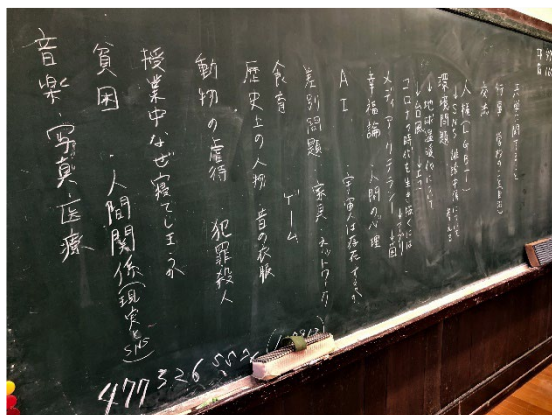
2 学期が始まってすぐの探求の日の初回には、探求とは何かという問いについて、クラスで探求からイメージすることを書き出しマッピングして共有した。第 2 回には、高等科 3 年生の司会のもと夏休みに調べた問いや自分の関心のあるテーマを中等科 1 年生から高等科 3 年生までの異学年グループで共有した。



〈探求からイメージすることについて中等科 1 年生のマッピング〉



〈高等科 3 年生の司会のもと、夏休み中に探求した内容の共有を行う〉



〈黒板に書き出された、夏休み中に探求したテーマの一覧〉

3. 探求の日の活動

探求の日には、生徒たちは通常、教員との面談、個人での調査や友達とのディスカッション、学校で行われる講座やワークショップへの参加などの活動を行った。

教員との面談は、2 学期の前半と後半で形を変えて行われた。2 学期の前半には、生徒は様々な教員と面談を行った。最初、中々自分の問いを立てることができない生徒に対しては、問いを立てる手助けとなるために、何に興味を持っているのか、なぜ興味を持ったのか、これからどのように進めていくかなどを、対話をしながら整理し、問の形にしていった。2 学期の後半からは、生徒一人一人にその問いに応じてアドバイザーの教員を割り当て、生徒は探求の進め方を、アドバイザーの教員と相談しながら決めていくことにした。一人の教員は、10 人～16 人の生徒をアドバイザーとして受け持った。探求の時間以外にもアドバイザーと生徒との探求についての相談は行われた。

生徒の探求の進め方は様々で、学園内では図書館や各自が持参しているデバイスを利用して書籍や WEB サイトから情報を集めたり、動物や植物の観察や実験を行ったり、インタビューやアンケートを行ったりしていた。互いに近いテーマについて探求している生徒も多くおり、探求の時間の中で似たテーマの人が集まり、上級生のファシリテートのもと、グループディスカッションを行う

機会も設けた。

探求の日には学外で学ぶことも可能とした。中等科は教員の引率が必要、高等科は生徒だけでも校外学習可能という違いは設け、また新型コロナウイルス感染対策のための制限もあったが、その制限の中で学外の施設に見学に行ったり、講演会やボランティア活動に参加したりするなど、1 日中使える探求の時間を有効に活用していた。また、zoom を用いての企業見学やインタビューを行う生徒もいた。

探求の日には、生徒が探求を進めていくにあたって有用な知識や技術に関する講座やワークショップもいくつか行った。方法はレクチャー動画の配信、zoom や対面でのワークショップで、内容としては、「リフレクションの意味と方法」「インタビューの仕方」「インターネットで情報検索する方法と注意点」「図書館の使い方」「アンケートのとり方」の 5 つを行った。また、日本経済新聞の記者の方にご協力いただき、問いの立て方についてのワークショップを男子部と合同で行った。



〈教員と相談しながら探求を進める〉



〈学園内で見つけた爬虫類の共生についての探求の様子〉



〈図書館の使い方に関するワークショップ〉



〈似たテーマの人たちでのディスカッション〉



〈zoom を用いたインタビューの仕方についてのワークショップ〉



〈プライドハウス東京レガシーの見学〉

2つの視点を盛り込みリフレクションを書く

視点1 自分の探求/学びのプロセス
自らの今まで/今回/これからに注目し、
自己の変容をメタ認知する視点

視点2 他者の考え、探求/学びのしかた
他者との対話を通し、自己の認識を広げたり深めたりするとともに
自己の探求/学びのしかたの意味やよし悪しを検討する視点

・参考: [今 隆史 \(2010a\)](#)、[今 隆史 \(2010b\)](#)

〈リフレクションについてのレクチャー動画〉

IV. 3 学期 まとめと共有

探求のまとめは、発表とレポートの2つの形で行った。

発表は2月4日、5日に、「共有の会」として行った。この会は、探求で一人一人が学んだことを、ポスターや作品、プレゼンテーションなどの形でまとめ発表したり、他者の発表を聴いたりすることで理解を深めることを目的とした会である。全員が、「ポスター・作品展示」「小グループでの口頭発表」「全体での口頭発表」から好きな形式を選択して発表した。発表の準備には時間をかけすぎないことに注意して行った。

1 日目はポスター・作品発表の日とし、各教室に展示されたポスターや作品を学年ごとに見て回り、コメントを付箋に書いて発表者に残した。作

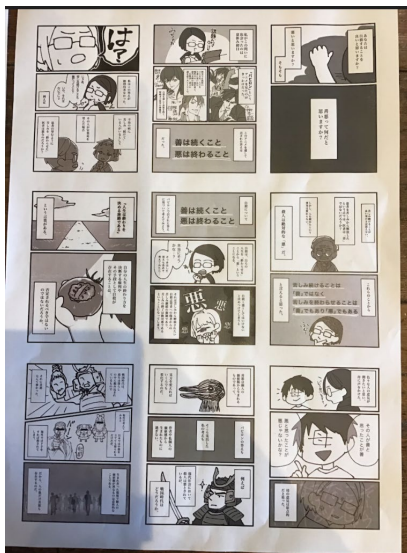
品には、「20人の大人に聞いた『働く理由』」のインタビュー集、「ノアの箱舟の模型」、「木のベンチ」、「漫画とそのネーム」、「油絵」などもあり、多様な探求のアプローチが表れていた。

2日目は口頭発表の日とし、小グループでの発表は10数名のグループに分かれ発表を聴き、全体発表は各教室からzoomで視聴した。中等科1年生から高等科3年生までが発表した。発表を聴いた人は、発表者に向けてコメントシートを記入して渡した。

共有の会の最後には2日とも、リフレクションを行い、またそのリフレクションをクラスで共有する時間を持った。

レポートは、一人一人が、今回の探求での自身の問い、その問いを立てた背景、調査研究の結果、自身の意見、そして探求を通しての自己変容を他者が理解できるようにまとめたものを作成した。3学期の始業式に一度アドバイザーに提出し、アドバイザーのコメントを参考にブラッシュアップしたものを共有の会の後に提出した。

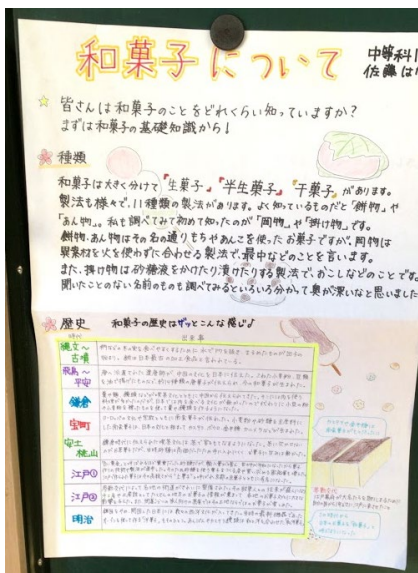
探求の評価は、アドバイザーの教員がこのレポートやそれまでの取り組み、リフレクションなどをもとに行った。そして一人ひとりに対して、アドバイザーが「伴走者コメントシート」を作成して生徒へのフィードバックとした。



〈高等科2年生のポスター〉



〈高等科3年生の作品とポスター〉



〈中等科1年生のポスター〉



〈ポスター・展示を見る様子〉



〈小グループでの発表〉



〈zoom を用いた全体発表〉

V. 生徒が行った探求の例

生徒が行った探求のいくつかについて、その取り組みを簡単に示す。

1. 中等科 3 年「親孝行とは？」

夏休みの家族との会話から親孝行とは何かということに疑問を持ち、日本、アメリカ、韓国の親孝行について調べた。また日本国内における時代による親孝行の変遷についても調べた。その後、女子部生にアンケートを行い、女子部生が考える親孝行について調べ、これからの時代の親孝行について考察した。

2. 中等科 1 年「ブルーベリージャムホットケーキを作ろう！」

ブルーベリージャムホットケーキを作ってみたという動機から出発し、作る過程でアントシアニンの量による色の変化について調査した。その後、紫芋など身近なものによる色の変化の調査、世界の主食やフルーツについて、農業についてなど、次々と問いを発展させながら探求を行った。

3. 中等科 2 年「地球温暖化とは」

地球温暖化とは何か、その影響はどのようなところに表れているのか、本当に地球温暖化は進んでいるのか、ということに疑問に思い探求を行った。その後、社会が行っている地球温暖化対策について、製造、運輸、エネルギー、家庭などの視点から調べ、自分たちが日ごろの生活から行える地球温暖化対策について提案した。

4. 高等科 1 年「なぜオスカー・シンドラーはユダヤ人たちを救ったのか」

オスカー・シンドラーがユダヤ人を迫害から救った理由について、そもそもなぜ迫害を受けたのか、具体的にどのような扱いを受けたのかなど、問いに向かうなかでさらに複数の問いを立て、多角的に探求を進めた。オスカー・シンドラーの人物像についても調べ、何故シンドラーはユダヤ人を助けようと思ったのか、シンドラーが多くのユダヤ人を救えた理由、シンドラー以外の民衆とシンドラーの違いについて考察した。

この探求を通して、迫害の過程が、日本における関東大震災時の朝鮮人に対する差別と似ていることに気づき、人権についての意識を高めることができた。

5. 高等科 2 年「なぜ人は働くのか」

なぜ働くのかについて、20 人の大人にインタビューを行い、インタビュー集を作成した。そこから、働くことについて共通する事柄として、お金と仕事は切り離せないものだということ、「生活のため」という理由に加えプラスαの理由があること、広い意味で自分自身のために行っていることを上げ、その上で、「自分または社会の現状に対して『変えたい』、『もっとこうたい』、『さらに楽しみたい』など何か志すものがあるとき、そして、それが自分の職業と結びついたとき『仕事』は『志事』になる」として「志事」を定義し論じた。

6. 高等科 2 年「自治とは何か」

「自由学園で言われる自治、また求めている自治とは何か？」という疑問から出発し、グループで女子部の自治について探求した。他学年を交え

た自治を考える会や男子部生との意見交換を定期的に行い、教員や理事長との対話も複数回行いながら、自治に対する様々な考え方や自治の実態について調査しまとめた。またその中で、今の女子部に足りないものは、女子部を常に新しくし続けるシステムであると考え、女子部生が女子部についてより考えらえるような新しい委員システムを考え女子部に提案した。そして、自治とは主義のもとであり、女子部生が女子部をつくるために女子部の政治に意見し参加していくことが女子部の自治だと結論付けた。

7. 高等科 3 年「子ども食堂について」

5 人でチームをつくり、子ども食堂について、「子供」「貧困」「食」「支援」などそれぞれの視点から、探求した。日本における子ども食堂の実態について、西東京市と世田谷区の子ども食堂に見学に行き、場所、頻度、料金、客層、理念、コロナへの対応、食事、ルールなどの観点から比較を行った。また子ども食堂以外の支援方法についても調べ、古着の寄付や募金などの支援活動を行った。

8. 高等科 3 年「LGBTQ+の人々が生き活きできる温かい学校にするにはどうしたらいいか」

LGBTQ+の人々に思いを寄せ、共に生きていく社会を作るにはどうすればいいかを考えた。似た探求テーマの人と意見交換の機会を持ち、書籍や WEB ページ、映画鑑賞、プライドハウス東京レガシーの見学を通して LGBTQ+について情報を得て学ぶとともに、当事者の気持ちを知り、それまでの「LGBT について知ってもらう場所を作る」から「LGBT 当事者の人が安心できる居場所を少なからず作る」という方向に意識を変え探求を進めた。

自分たちの属する社会である学校を舞台にその実現を考え、LGBT に関する用語を学ぶための LGBT 用語カルタを作って大芝生でカルタ取りを行ったり、図書館への働きかけを行ったり、小グループでの発表を行ったりした。

VI. 本プログラムを振り返って

今年度の探求は、生徒自身が問いを立てるところから始めたが、ほとんど制約のない自由な状況

で自ら問いを立てるという経験を生徒はあまりしたことがなく、問いを立てるということに苦労する生徒も多くいた。1 日中探求に取り組むことのできる探求の日も、校外学習に行ったり、校内での調査実験や議論に熱心に取り組んだりして有効に活用できた生徒もいたものの、自分で計画を立てて取り組まなくてはいけないことに時間を持て余してしまう生徒もいた。必要に応じて教員のサポートの工夫も行ったが、結果として、生徒によってかなり学びの差があったと考えられる。全員が一律のことを学ぶのではなく、一人ひとり異なる学びが展開されるのは探求では当然のことではあるが、サポートの仕方については、今後更なる工夫が必要であると考ええる。

全体としては、最初は戸惑いもあったものの、段々と探求についての理解が深まっていくにつれて自分自身の学びを展開していけるようになっていった。最後に提出されたレポートに探求したテーマについての考察だけでなく探求に取り組む中で起こった自己変容について書く生徒や、年度が終わっても継続して探求を続けている生徒、探求が進路選択に繋がっていった生徒もいた。

最後の共有の会で、互いの探求内容を知ったことは、生徒にとってインパクトが大きかったようで、共有の会の後には様々な感想が提出された。その一部を示す。

「皆の探求内容が想像以上に多岐にわたっていたし、とても面白いものばかりだった。その人自身のことも少し知ることができ、自分の探求にも沢山の人がコメントをくれて励みになった」

「考えにはこれだけ振り幅があり、さらにこれだけ広がりを持って深められるということを感じ、改めて考えることの楽しさを知り、自分の問いに向かう姿勢もさらに一つ引き締まったように感じる」

「一人で探求に取り組む、ということは妥協することも突き詰めることも自分次第になってくるので、とても難しかったです。共有の会を通して、もう少し自分で突き詰めて調べることができたのではないかなとも思いました」

「今まで 50 時間もの時間を使って行ってきた活動で、初めて行われた活動でもあったので、正直、今までの活動期間の中にはどのようなことを

考え、どのような報告となるのか全く想像がつかず、疑問を抱くときもありました。しかし今回の会を経て、探求活動をぜひ来年、これからも続けてほしいなど強く思います。また、このような学びの形では現在の『学ばなくてはいけない。学ばされている』ような受動的な教育とは異なり学ぼうとする力が身につく気がしてすごく楽しかったです」

「今日色々な人の時間と気力と気づきと面白さがつまった、興味そそられる大作を見て、ああ面白いなー！ そうなんだー！ と感じるものをたくさん見ることができました。それは知らなかった事実やものごとの原因を知ることであったり、人の考えをきいて自分はどうかと考えることであったり、想像を超えるできごとと衝撃を受けることが、学びだと思ふし、私にとって楽しい学び方である。他の人が面白いと思ったことを、面白いと思った人が、その魅力を伝えてくれたので、視野や世界が普通の授業に比べて格段と広くなれる機会だった。今日 1 日色々なことを知れて面白かった。」

教員にとっては、自分の担当教科以外の内容の探求についてアドバイスを行うこと、学年やテーマの異なる 10 人以上の生徒を同時に見ていくことは非常に大変なことでもあった。また、探求を行う上で、教員自身がさらに学んでいかなくてはならないということも指摘された。しかしながら、準備段階から、それぞれの教員がそれぞれの持ち味を生かし、教員間で協力しながら取り組むことができ、その中で、生徒たちがお互いの興味関心を尊重し、生き生きと学べる環境を構築していくことに努めることができたと考える。また、この探求を通して、普段の授業では見られないような生徒の姿に触れたり、「教える」ということではなく「伴走する」という立場で生徒と関わったりすることで、生徒と教員の間に新たなつながりが生まれたという側面もあった。そういう意味で、この探求の取り組みは、教員の「生徒観」「学び観」を新たにしていくことにも繋がったのではないかと考える。

VII. 謝辞

本稿は鈴木がまとめているが、2020 年度の探求は、遠藤智史先生、金井知子先生、高松功太郎先生、星住リベカ先生がともに中心となって運営を進めた。またその他にも、ガイドの作成、アドバイザーの組み分け、共有の会の運営では、その都度、力を出してくださる方のご協力があった。

最高学部の成田喜一郎先生には、準備段階から沢山のご助言、ご協力をいただき、探求について女子部生へのレクチャーもしていただいた。図書館のスタッフの皆様には、ワークショップの企画や生徒が探求しているテーマに関する書籍の準備、沢山の生徒の質問への対応など、様々な面でご協力いただいた。講師の皆様には、通常の授業位階の場面でも様々な生徒の質問等に丁寧に答えていただいた。保護者の皆様や卒業生の皆様にも、生徒に対して専門分野からのお話をさせていただいたり、ボランティア活動などに生徒と一緒に参加させて頂いたりするなどご協力をいただいた。それぞれの方のご協力で心より感謝申し上げます。